

「日本語の形式名詞の意味と用法」
「うち」と「なか」の類似性と相違点

言語学・応用言語学専攻

1 LT01083R

平成 13 年入学

田中英恵

平成 17 年 1 月提出

要旨

本論文では、形式名詞「うち」と「なか」それぞれが、どのような条件を文に要求し、その結果、文全体の意味に変化をもたらすのかを明らかにすることを目標とする。そのためには、次の3タイプに分類して考察する必要がある。タイプⅠは、「うち」と「なか」が両方使用できるものである。このタイプの場合、「うち・なか」節が主節からある名詞句を選び出す範囲を指定する。また、この場合、連体修飾句「～のうち」と比較すると、「うち・なか」節と選び出す名詞句に語順の制限がない。タイプⅡは、「うち」のみが容認されるものである。「うち」節は、主体動作がおこなわれる期間を表す。「うち」節の表す動作と主節の表す動作の時間関係に注目し、主節動詞のアスペクトを観察することによって、意思動詞、無意思動詞の違いによって意味が異なることを示す。タイプⅢは、「なか」のみが容認されるものである。「なか」節は、主体動作の状況や環境を説明する。このタイプは、さらに2つの下位タイプに分類される。本論文において、形式名詞が構文に与える役割を明らかにし、日本語の文構造の研究に寄与できれば幸いである。

目次

| | |
|------------------------------|----|
| 要旨 | 2 |
| 0 . はじめに | 4 |
| 1 . 範囲タイプ「うち・なか」の用法と意味 | 5 |
| 2 . 期間タイプ「うち」の用法と意味 | 7 |
| 2 . 1 期間タイプ A | 7 |
| 2 . 2 期間タイプ B | 9 |
| 2 . 3 期間タイプ C | 11 |
| 2 . 4 期間タイプとは | 11 |
| 3 . 状況タイプの用法と意味 | 13 |
| 3 . 1 状況タイプ A | 13 |
| 3 . 2 状況タイプ B | 14 |
| 3 . 3 状況タイプとは | 16 |
| 4 . おわりに | 17 |
| 謝辞 | 19 |
| 参考文献 | 19 |

0 . はじめに

「うち」と「なか」には、同じ意味だと考えられる用法と意味の異なる用法の2つがある。

- (1) a. 美術館で見た作品のうちで、最も印象に残っているものはミイラです。
b. 美術館で見た作品のなかで、最も印象に残っているものはミイラです。
- (2) a. 私がもらったうちでこのバッグだけは偽物だった。
b. 私がもらったなかでこのバッグだけは偽物だった。

(1)と(2)では、数ある「作品」から「ミイラ」を、「私がもらった」ものから「このバッグ」を選び出している。この「うち」と「なか」は何かを選び出す範囲を指定していると考えられる。

「うち」と「なか」には意味が異なっていると考えられる用法もある。

- (3) a. 母が帰ってこないうちにゲームを存分に楽しむ。
b. *母が帰ってこないなかにゲームを存分に楽しむ。
- (4) a. *インターネットが普及するうち、うちにはまだファックスもない
b. インターネットが普及するなか、うちにはまだファックスもない

(3)では、「うち」は使用できるが「なか」が使用できない。これに対して、(4)では「なか」は使用できるが「うち」は使用できない。では、「うち」が「ゲームを存分に楽しむ」が行われる動作の期間を指定しており、(4)では、「なか」が「ファックスがない」という状態の状況を説明しているので、これらの点が、「うち」と「なか」の用法の違いの条件として関係していると考えている。

本論文では、(1)や(2)のように「うち・なか」節が何かを選び出す範囲を指定していると考えられるものを「範囲タイプ」、(3)のように「うち」節が、主節が行われる動作の期間を指定していると考えられるものを「期間タイプ」、(4)のように「なか」節が主節の状態の背景や状況を説明していると考えられるものを「状況タイプ」と呼ぶことにする。

本論文では、この3つのタイプの用法と本質的な意味を明らかにすることを目標とする。以下、例文をさらに交えながら考察していく。

1. 範囲タイプ「うち・なか」の用法と意味

範囲タイプは、「うち・なか」節が主節のある名詞句を選び出す範囲になっているものである。例えば、(5)では、「私が今までで会った{うち・なか}で」で、これまでの人生の間に会った人物がリストアップされ、その中から「彼」が選ばれている。

- (5) 私が今までで会った{うち・なか}で彼が一番素敵な人だ。
- (6) 色んなダイエットを試してきた{うち・なか}で、豆腐ダイエットが一番よかった。
- (7) 今まで行った{うち・なか}で一番暑かったのはシンガポールです。
- (8) 私が感じた{うち・なか}でいくつかの不安が現実となった。
- (9) 私がもらった{うち・なか}でこのバッグだけは偽物だった。
- (10) 彼が跳んだ{うち・なか}で5回目が一番悪かった。
- (11) あそこに学生が座っている{うち・なか}に留学生がいる。
- (12) 皮をむいた{うち・なか}からりんごを3個子供に食べさせる。
- (13) 一次試験に合格した{うち・なか}から、さらに人数を絞る。
- (14) 母がりんごを買ってきた{うち・なか}から、3つ皮をむいた。

本論文では、「うち・なか」の前が節になっているものを扱っているが、格助詞を入れた「～のうち・なか」という形もある。

- (15) [学生の{うち・なか}]で三人が留学生だ。
- (15)' *三人が[学生の{うち・なか}]で留学生だ。

先に、この「～のうち」の特徴として、選び出す名詞句と「うち・なか」節の語順は、「うち・なか」節が先行しなくてはならないということや、選び出された名詞句に後続

する格助詞に特に制限がないことが指摘されている。

しかし、次のような場合には の条件は満たされなくてもよい。(16)では、「今まで行った国」がリストアップされ、その中から「シンガポール」が選出されているのだが、(16)''では の条件に反している。

(7)より

(16) 今まで行った国の{うち・なか}で一番暑かったのはシンガポールです。

(16)' 今まで行った国の{うち・なか}でシンガポールが一番暑かったです。

(16)'' シンガポールは今まで行った国の{うち・なか}で一番暑かったです。

では、本論文で扱う、「うち・なか」の前が節になっている場合はどうであろうか。先に挙げた例文の「うち・なか」節と選出された名詞句の順序を入れ替えてみる。名詞句は下線で示す。

(17) 彼が[私が今までで会った{うち・なか}で]一番素敵な人だ。

(18) 豆腐ダイエットが[色々なダイエットを試してきた{うち・なか}で]一番よかった。

(19) *一番暑かったのは[今まで行った{うち・なか}で]シンガポールです。

(19)' [今まで行った国の{うち・なか}で]シンガポールが一番暑かったです。

(20) いくつかの不安が[私が感じた{うち・なか}で]現実となった。

(21) このバッグだけは[私がもらった{うち・なか}で]偽物だった。

(22) 5回目が[彼が跳んだ{うち・なか}で]一番悪かった。

(23) 留学生が[あそこに学生が座っている{うち・なか}に]いる。

(24) りんごを 3個[皮をむいた{うち・なか}から]子供に食べさせる。

(25) さらに人数を[一次試験に合格した{うち・なか}から]絞る。

(26) 3つ[母がりんごを買ってきた{うち・なか}から]皮をむいた。

以上見てきたように、「うち・なか」節と名詞句の順序を入れ替えることは可能である。
(ただし、(19)のような分裂文では少し条件が異なる)

「うち・なか」節は名詞句を選び出す、つまり、修飾しているので、その名詞句は不可欠であるといえる。以下の例を見てみよう。

(27) マジックショーで

- a. 3枚のカードの{うち・なか}でお客様の選んだカードはこれですね。
- b. *3枚のカードの{うち・なか}で これですね。

(28) 娘と母の会話

母：りんごをむいてちょうだい

- 娘： a. 3個ある{うち・なか}で何個むいたらいいの？
b.* 3個ある{うち・なか}で いいの？
c. 3個ある{うち・なか}で何個？

以上のことから、範囲タイプで文法的に要求されることは、修飾先となりうる名詞句があるということになる。「うち・なか」節との語順の前後関係は問題ない。

2. 期間タイプ「うち」の用法と意味

期間タイプは、解釈の違いからさらにA、B、Cの3つに分類することができる。以下、それぞれのタイプの文法的特徴を見ていき、それが解釈の違いにどのような影響を与えているかを考察する。

2.1 期間タイプA

期間タイプAは「うち」節が主節の動作を完了する期間の条件になっているものである。例えば、(29)では「ゲームを存分に楽しむ」ことができるのは、「母が帰ってこない」時間のみであって、母が帰ってくると、ゲームができなくなってしまうのである。

(29) 母が帰ってこない{うち・*なか}にゲームを存分に楽しむ。

(30) 掃除が終わらない{うち・*なか}に友人が訪ねてきた。

- (31) 夜が明けない {うち・*なか} から父は乾布摩擦する。
- (32) 学生である {うち・*なか} にこの本は読んでおきたい。
- (33) 雨がやんでいる {うち・*なか} に買い物を済ませる。
- (34) 先生が来ない {うち・*なか} に割ったガラスを片付ける。
- (35) 研究室に先輩がいる {うち・*なか} に質問をする。
- (36) 親にばれない {うち・*なか} に赤点の答案用紙を捨ててしまった。
- (37) 友人に勝利を譲るため、ゴールしない {うち・*なか} に転んだ。
- (38) バイトに行く時間にならない {うち・*なか} におにぎりを食べておく。
- (39) 最近の小学生は成長しきらない {うち・*なか} からダイエットをして痩せる。
- (40) 次の彼氏ができない {うち・*なか} に前の彼氏のことは忘れる。

主節動詞のアスペクトに注目すると、「楽しむ」、「訪ねてきた¹」、「乾布摩擦する」、「済ませる」、「片付ける」、「する」、「転んだ」といった主体の動作を表す動詞ばかりが使われている ((39)(40)については2 . 4 参照)。

また(32)の「読ん+でおく(テオク)」、(36)の「捨て+てしまった(テシマウ)」を見ると、「~テオク」は益岡・田窪(1992: pp.17-18)によると、「ある目的のために準備としてある動作を行うことを表す」とあり、これも、主体の動作を表している。「~てしまう」の働きは「動きの完了性を表す」益岡・田窪(1992:112)とあり、これも主体の動作を表しているといえる。((37)については2 . 4 参照)

このことから、期間タイプ A では、主節の動詞には主体の動作を表す動詞、つまり、意

¹ 「訪ねてきた」を益岡・田窪(1992: pp.112-113)では「訪ね+テキタ」とし、「テクル」を「事態の接近・離反、動作の受取、接近・離反を伴う動作等を表す」アスペクトの一部として解説しているが、本論文では「訪ね+て+来た」(「て」は接続詞)とし、「来た」を動詞と捉える。

思動詞が要求される。したがって、形容詞文や名詞述語文は現われることができないといえる。

(29)より

(41) 母が帰ってこない{うち・*なか}に弟はゲームを存分に楽しむ。

(41)' *母が帰ってこない{うち・*なか}に弟はゲームを存分に楽しい。

ただし、文タイプが発話タイプになると、名詞述語文でも容認される場合がある。

(29)より

(42) お母さんが帰ってこない{うち・*なか}にゲームだ! (子供の台詞)

(31)より

(43) 夜が明けない{うち・*なか}から父は乾布摩擦だ。(息子の呆れ口調で)

(35)より

(44) 研究室に先輩がいる{うち・*なか}に質問だ! 急げ! (院試前の受験生の台詞)

動詞のアスペクトを考える際にテキストを考慮する必要があることは工藤(1995)でも指摘されているところである。本論文では、文タイプは一般的な記述された文に限って展開していく。

このほかに期間タイプAの特徴として挙げられるのが、「うち」節に否定形が入りやすいという点である。先に挙げた例文の中でも、6つが否定形式の「ない」が使われている。これは、近い未来、「うち」節が表す状態が必ず限界に達し、変化してしまうことが念頭にあり、その変化と主節の動作との時間的対立が強く意識されているからであると考えられる。

さらに、もう一つ特徴を挙げるならば、「うち」節と主節の主体は必ずしも一致しないという点である。

2.2 期間タイプB

期間タイプBは「うち」節と主節の表す動作の同時進展性を強く示すタイプのものである。例えば、(46)では、「締め切りが迫る」のは、日に日に、進行する時間の変化であり、その時間が経つ間に、徐々に「食欲がなくなった」という身体的変化が起こり始めたのである。

(45) 長々とメールをしている {うち・*なか} に言いたいことを忘れてしまった。
(cf. (40))

(46) 締め切りが迫る {うち・*なか} に食欲がなくなった。

(47) なべを食べる {うち・*なか} に体があったまった。

(48) 勉強している {うち・*なか} に眠たくなってきた。

(49) 彼の話の聞いている {うち・*なか} に問題の全貌が見えてきた。

(50) 皆で話し合う {うち・*なか} に考えが変わった。

(51) 締め切りが迫り、食事をとばしている {うち・*なか} に彼はすっかり痩せた。
(cf. (39))

(52) 先生が熱く説教している {うち・*なか} に次の試験のやる気が失せた。

期間タイプ A 同様、主節動詞のアスペクトに注目すると、「なくなった」、「あったまった」、「変わった」、「失せた」と主体の変化を表す動詞ばかりが使われている。

また、(48)、(49)の「眠たくなっ+てきた(テクル)」、「見え+てきた(テクル)」に現われる「~テクル」は主体の状態が徐々に変化していることを表している。

このことから、期間タイプ B は、主節の動詞に主体の変化を表す動詞、つまり、無意思動詞を要求している。したがって、これも期間タイプ A 同様に、形容詞文や名詞述語文が現われることができないといえる。

(47)より

(53) なべを食べる {うち・*なか} に体があったまった。

(53)' *なべを食べる {うち・*なか} に体があったかい。

(54) 草むしりをしている {うち・*なか} に、空が暗くなった。

(54)' *草むしりをしている {うち・*なか} に、空が暗い。

上に挙げた例文のなかでは、「うち」節と主節の主体が一致しているものが多いが、「うち」節と主節の主体が一致している必要はない。

2.3 期間タイプC

期間タイプCは、主節が「うち」節が表す状況下で偶然起こったものである。例えば、(55)では、母親が出かける前に、娘に「今日は遅くなるから私が帰ってくる前にあなたが夕食の支度をしておいてね」と言い残して出かけたならば、「母が出かけているうちに」は期間タイプAの動作を完了する期間の条件タイプに分類することもできる。しかし、一方で、単に、偶然、それはよくできた娘さんで、母親の帰りが遅いので、自主的に自分で夕食の支度をしたところ、母親が帰宅する前に作り終えてしまった、という解釈をすることもできる。この点で、期間タイプAとは異なる。

(55) 母が出かけている{うち・*なか}に夕食の支度を終えた。

(56) 祭りが始まった{うち・*なか}からいくつかの小競り合いがあった。

(57) 予選を勝ち進んでいた{うち・*なか}から、この選手は足を痛めていた。

(58) 立ち話をしている{うち・*なか}に雨が降ってきた。

(59) 電車で揺られている{うち・*なか}にいつの間にか寝てしまった。

(60) 大掃除をする{うち・*なか}に大切にしていた友人からの手紙を捨ててしまった。

(cf. (36))

(61) 寝不足でふらふらと歩いている{うち・*なか}に電柱にぶつかって転んだ。

(cf. (37))

主節動詞のアスペクトを見てみると、主体の動作を表す動詞、主体の変化を表す動詞、存在を表す動詞（「(56)あった」）など、様々である。特に、存在を表す動詞を使うことができる点は他のタイプと大きく異なる。したがって、主節の動詞の条件に、主体の意思は無関係である。さらに、「うち」節と主節の主体は必ずしも一致しない。このように、期間タイプCはこれまでで1番条件が少ないタイプだといえる。

2.4 期間タイプとは

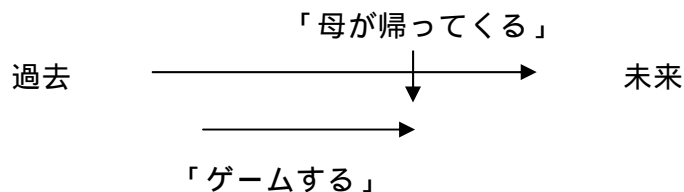
以上みてきた3つのタイプから、期間タイプについてまとめる。

まず、期間タイプAは、「うち」節が主節の条件になっていることから、図示すると以

下のようになる。ある時間軸に沿って、「ゲームをする」という動作が行われ、その動作は、「母が帰ってくる」という時点で必ず終了しなければならない。

((29)より)

(62)

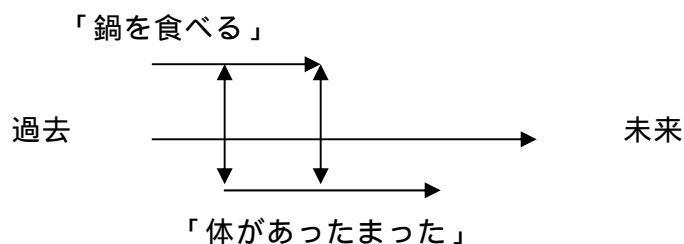


期間タイプ A では、「うち」節が表す期間以上に、主節の動作が続いてしまうと、事態が成立しない。これがタイプ B と決定的な違いである。

一方、期間タイプ B は、「うち」節と主節の「因果関係」というよりも、「うち」節と主節の表す動作の同時進展性を強く示す、という方が適切であると考えられる。また、タイプ A と大きく違うのは、主節の動作が、「うち」節以降も継続しているという点である。これを先ほどのように図示するならば、ちょうど矢印で囲まれたところが、「鍋を食べる」と「体があつたまつた」の二つの動作が同時進行している箇所である。そして、重要なのは、「体があつたまつた」状態が、「鍋を食べる」という動作が終了後も継続していることである。

((47)より)

(63)



期間タイプ C はこの両方が両立しているタイプである。主節でタイプ A と同じ動詞を使っても、意思動詞として使うか、無意思動詞として使うかで文の解釈が異なる。このことは、タイプ A(39)とタイプ B(51)でも言える。(39)では「痩せる」を意思動詞として使用しているが、(51)では無意思動詞として使用している。そのほかにもタイプ A(36)「捨てる」(意思動詞)とタイプ C(60)「捨ててしまった」(無意思動詞)、タイプ A(37)「転んだ」(意思動詞)とタイプ C(61)「転んだ」、タイプ A(40)「忘れる」(意思動詞)とタイプ B(45)「忘れてしまった」などがある。

工藤(1995)では、このように「主体の動作とともに変化を捉えている両義的なもの」として「2側面動詞(自動詞)」をあげている。そこには「くだる、ころがる、したたる、すすむ、たれる、のぼる、ふえる、へる」が挙げられている。これらの動詞も、これまで見たような「~テイク」、「~テシマウ」、「~テオク」、「~テクル」などのアスペクトを表す語を加えれば、意思動詞、無意思動詞として機能する。

このように、期間タイプで文法的に要求されることは、主節の動詞が意思動詞であるか、無意思動詞であるかということになる。その結果、文の解釈には、タイプA:「うち」節が主節の動作を完了する期間の条件になっているもの、タイプB:「うち」節と主節の表す動作の同時進展性を強く示すもの、タイプC:主節が「うち」節が表す状況下で偶然起こったもの、この3つに分類される。

また、「うち」に続く助詞は、「に」と「から」がほとんどである。そして、この助詞を省略することはできない。これは状況タイプと比較される場所である。

3. 状況タイプの用法と意味

3.1 状況タイプA

状況タイプAは、期間タイプB同様に、「なか」節と主節の動作の同時進展性を表すものである。例えば、(64)では、「計画を進める」間に、同時進行で、「問題が出てきた」ことを表す。

(64) 私たちは計画を進める{*うち・なか}で出てきた問題を議論した。

(65) 子供たちは間違いを繰り返す{*うち・なか}で正しい文法を身につける。

(66) 毎日勉強してきた{*うち・なか}で努力に勝るものはないと気づいた。

(67) 毎日勉強する{*うち・なか}から疑問が生れる。

(68) 企業研究をした{*うち・なか}で自分がやりたい職種を発見できた。

同時進行とはいえ、「なか」節の環境がなければ、主節の結果は生れない。これは、期間タイプBにもいえることだが、「うち・なか」節と主節の時間の順序は「うち・なか」

節が先行する。

一方、期間タイプ B と異なる点は、主節の動詞が意思動詞であるか、無意思動詞であるかという条件である。上に挙げた例文を見ると、意思動詞「議論した」、「身につける」、「発見できた」があり、無意思動詞「気づいた」、「生れる」が混在している。状況タイプでは主節の動詞が意思動詞であるか、無意思動詞であるかということは要求されない。

また、「なか」節と主節の動作の主体が一致しているという点も、期間タイプ B とは異なる点である。

3.2 状況タイプ B

状況タイプ B は「なか」節が主節の行われる状況・環境を説明するものである。例えば、(69)では、「マラソン大会は行われた」状況を「雨が降るなかで」で説明している。

- (69) a. 雨が降る { *うち・なか } でマラソン大会は行われた。
b. 雨が降る { *うち・なか } マラソン大会は行われた。
c. 雨が降る { *うち・なか } でマラソン大会が行われた。
d. 雨が降る { *うち・なか } マラソン大会が行われた。
- (70) a. ラジオが流れる { *うち・なか } で勉強するのは難しい。
b. ラジオが流れる { *うち・なか } 勉強するのは難しい。
c. ラジオが流れる { *うち・なか } で勉強するのが難しい。
d. ラジオが流れる { *うち・なか } 勉強するのが難しい。
- (71) a. 風鈴がゆれる { *うち・なか } でスイカを食べるのはおいしい。
b. 風鈴がゆれる { *うち・なか } スイカを食べるのはおいしい。
c. 風鈴がゆれる { *うち・なか } でスイカを食べるのがおいしい。
d. 風鈴がゆれる { *うち・なか } スイカを食べるのがおいしい。
- (72) a. 皆が勉強する { *うち・なか } で彼はゲームをしていた。
b. 皆が勉強する { *うち・なか } 彼はゲームをしていた。
c. *皆が勉強する { *うち・なか } で彼がゲームをしていた。
d. *皆が勉強する { *うち・なか } 彼だけがゲームをしていた。
- (73) a. 先生が講義をする { *うち・なか } で、私は次の時間の予習をしていた。
b. 先生が講義をする { *うち・なか } 、私は次の時間の予習をしていた。

- c. *先生が講義をする{*うち・なか}で、私が次の時間の予習をしていた。
- d. *先生が講義をする{*うち・なか}、私が次の時間の予習をしていた。
- (74) a. インターネットが普及する{*うち・なか}で、うちはまだファックスもない。
- b. インターネットが普及する{*うち・なか}、うちはまだファックスもない。
- c. *インターネットが普及する{*うち・なか}で、うちがまだファックスもない。
- d. *インターネットが普及する{*うち・なか}、うちがまだファックスもない。
- (75) a. 自然環境が破壊される{*うち・なか}で私たちは対策を考えた。
- b. 自然環境が破壊される{*うち・なか} 私たちは対策を考えた。
- c. ?自然環境が破壊される{*うち・なか}で私たちが対策を考えた。
- d. ?自然環境が破壊される{*うち・なか} 私たちが対策を考えた。

状況タイプ A とは逆に、「なか」節と主節の主体は一致していない。また、状況タイプ B は「なか」節が主節の行われる状況・環境を説明するものであるので、「なか」節と主節の時間の順序は意味的に問題ではない。

主節の「は」と「が」を入れ替えると、このタイプの中にも若干の相違が見えてくる。(71)までは「は」でも「が」でも解釈に大差はないが、(72)以降は、「が」に置き換えると非文になる。(72)以降は、「なか」節の状況と主節の状況において、主節の主体を「なか」節の状況と対比させ、取り立てているようである。(75)にいたっては、「は」と「が」で明らかに解釈が異なっている。

このことから、(69)~(71)での「なか」節の働きは、単に、主節の状況・環境の説明にとどまるが、(72)以降での働きは、「なか」節と主節の主体を対比させることだといえる。

これも状況タイプ A と異なる点であるが、主節のテンスがタ形でも、「なか」節のテンスはタ形になることができない。

(69)より

- (76) a. *雨が降った{*うち・なか}でマラソン大会は行われた。
- b. *雨が降った{*うち・なか} マラソン大会は行われた。

このように状況タイプ B の「なか」節は、今までの節よりもかなり特殊で、独立しているといえる。

3.3 状況タイプとは

以上のことから状況タイプについてまとめる。

状況タイプ A は「なか」節と主節の動作の同時進展性を示している。これは期間タイプ B とほぼ同じ解釈が可能である。しかし、期間タイプ B の例文の後ろの助詞を「で」に変えて、「なかで」にすると非文になる。

(77) *長々とメールをしている { *うち・なか } で言いたいことを忘れてしまった。

(78) *締め切りが迫る { *うち・なか } で食欲がなくなった。

(79) *なべを食べる { *うち・なか } で体があつたまつた。

(80) *勉強している { *うち・なか } で眠たくなってきた。

(81) *彼の話を知っている { *うち・なか } で問題の全貌が見えてきた。

(82) *皆で話し合う { *うち・なか } で考えが変わった。

(83) *締め切りが迫り、食事をとばしている { *うち・なか } で彼はすっかり痩せた。

(84) *先生が熱く説教している { *うち・なか } で次の試験のやる気が失せた。

一方、状況タイプ A の例文の後ろの助詞を「に」に変えて、「なか」ではなく、「うち」にしても非文にはならない。

(85) 私たちは計画を進める { うち・*なか } に出てきた問題を議論した。

(86) 子供たちは間違いを繰り返す { うち・*なか } に正しい文法を身につける。

(87) 毎日勉強する { うち・*なか } に努力に勝るものはないと気づいた。

(88) 毎日勉強する { うち・*なか } に疑問が生れる。

(89) 企業研究をした { うち・*なか } で自分がやりたい職種を発見できた。

状況タイプ B では、主節の動作が行われる状況や環境を説明している。これは、「うち」と違い、時間的な説明ではなく、環境という空間的な説明をしていると思われる。これは「なか」が、形式名詞とはいえ、「なか」が本来持っていた「空間的内部」という意味を保持しているからだと考えられる。このことから、(77)~(84)で、「なかで」に置き換えた時に非文になったのは、(77)~(84)では、時間的順序を重視していたにもかかわらず、「なか」というまったく関係のない空間的要素が入ってきたために非文になったと推測される。

期間タイプで使われていた「うち」の後ろの助詞「に」は益岡・田窪(1992)の「事態の時を表す用法」に相当すると考える。状況タイプで使われていた「なか」の後ろの助詞「で」は「出来事・動作の場所を表す用法」に相当すると考える。ここからも、「なかで」の「なか」が本来の「空間的内部」の意味を残していると言えるのではないか。

また、状況タイプ B は、これまで見てきた例文の中で、唯一、形式名詞の後ろの助詞を省略できるグループである。形式名詞も、名詞である以上、後続する要素がある場合、格助詞が必要である。ところが状況タイプ B はこれに堂々と反している。これは、「なか」説が副詞節であることと関係があると考えられる。

アスペクトの副詞として、「いまにも、もう、ちょうど、まだ、だんだん、ますます、etc.」などがある。これらが文中に現われる時、格助詞は必要ない。したがって、副詞節である「なか」節も、述語に修飾する際、格助詞を落とすという現象がうまれるのではないだろうか。これは他のタイプの「うち」節や「なか」節とは異なり、独立性が高いことが要因になっていると考えられる。

4. おわりに

以上、「うち」と「なか」について、大まかに3つのタイプ「範囲タイプ」、「期間タイプ」、「状況タイプ」を考察してきたが、その類似性、相違点はどこにあるのだろうか。

まず、「範囲タイプ」については、「うち」と「なか」と文法的にも意味的にもほぼ同じであるといえる。進展が見られた点といえば、「~のうち」にある、「うち・なか」節と名詞句とでは、「うち・なか」節が先行しなければならないという条件は、「うち・なか」が節になっている今回のような場合は必要でないという点である。なぜ、節になるとこの条件が必要なくなるのかは、今後の課題である。

「期間タイプ」については、主節動詞が意思動詞であるか、無意思動詞であるかという点が大きなポイントであった。意思動詞である場合、「うち」節は主節の動作が完了すべき期間の条件を表す。無意思動詞である場合、「うち」節は、「うち」節と主節の動作の同時進展性を強く示す働きをする。この、意思動詞、無意思動詞は、同じ動詞でも両方使

い分けができる動詞の場合、どちらの意味で使うかによってタイプ A になるかタイプ B になるかが決定される。これら、動詞の意思の有無を問題にしないのが、タイプ C であった。タイプ C は主節動作が、「うち」節の状況・環境で偶然に起こったものである。期間タイプの共通点は、「うち」節と主節の主体が一致しなくてよい点、「うち」の後に来る助詞が「から」、特に「に」が好まれる点、そして、この助詞を省略できない点である。この、助詞を省略できないというのは、範囲タイプ、一部の状況タイプと異なる点である。意味の上で、期間タイプで重要なのは、「うち」節と主節の時間の展開のあり様である。「うち」節が主節に先行するのはどのタイプにも共通するところであるが、その後の「うち」節の動作の継続時間に大きな違いがある。主節の表す動作が、「うち」節が表す動作によって、完了すべきか継続すべきかが異なるのである。

最後に「範囲タイプ」であるが、2つのタイプに分類したが、その意味的性質は大きく異なっている。タイプ A は「期間タイプ B」にほぼ等しい解釈が可能である。それは、タイプ A と「期間タイプ B」と助詞を入れ替えてみた例文を思い出してほしい。ただし、タイプ A が「期間タイプ B」と異なる点は、動詞の意思の有無が関係なかったという点である。また、「なか」の後ろに来る助詞も「に・から」を使うことはできなかった。

タイプ B は、これまでのタイプとは異なり、副詞節として、独立性の高いものであった。それは次の点からいえる。タイプ A と異なる点が、主節のテンスがタ形であっても、「なか」節のテンスがタ形になることができない点、「なか」節と主節の主体が一致しない点であるということだ。また、「なか」の後ろの助詞を省略できる点も大きく異なる。これについては、そもそも「なか」節が副詞節であることに起因していると考えられる。アスペクトの副詞が助詞を必要としないように、副詞節「なか」節も助詞を省略できるのではないだろうか。これは、タイプ B が他のタイプよりも独立性が高い故に現われる特徴であると考えられる。タイプ A とタイプ B の共通点は、「なか」の後ろの助詞が「で」で現われることである。この「で」は「出来事・動作の場所を表す用法」であり、期間タイプのように時間とは関係がない。このことから、形式名詞「なか」は名詞「なか」が持つ「空間的内部」という意味特徴を残していると考えられる。形式名詞は本来の実質的な意味が薄れ、形骸化した名詞と呼ばれるが、やはり、本来の「名詞」の意味をある程度は保持しているのだ。

意味の上では、「なか」節が、主節が行われる動作の状況や環境を説明するという点であった。しかし、主節の「は」と「が」を入れ替えると、主節を「なか」節の表す状況・環境から取り立てる意味になる。この点については、「は」と「が」が多くの問題を抱えているために、更なる議論を重ねる必要があると思われる。

謝辞

< 略 >

参考文献

1. 工藤真由美 『アスペクト・テンス体系とテキスト 現代日本語の時間表現 』(1995)
ひつじ書房
2. 国立国語研究所『国立国語研究報告書 82 現代日本語動詞のアスペクトとテンス』(1985)
国立国語研究所
3. 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 』くろしお出版
4. 益岡隆志 『新日本語文法選書 2 複文』(1997) くろしお出版
5. 益岡隆志・田窪行則共著 『基礎日本語文法 改訂版 』(1992) くろしお出版